

## 在宅高齢者の生活範囲拡大に影響を及ぼす要因について

野本 正仁<sup>1)</sup> 石森 卓矢<sup>1)</sup> 腰塚 洋介<sup>1)</sup> 美原 盤<sup>2)</sup>

1) 公益財団法人脳血管研究所 美原記念病院 リハビリテーション部

2) 公益財団法人脳血管研究所 美原記念病院 脳神経内科

[はじめに]高齢者は、身体機能の低下などさまざまな要因で外出頻度が減少し、生活範囲が狭小化する。生活範囲の狭小化は、ADL 能力低下、虚弱の発生、死亡リスクの増加を招くとされ、在宅療養中の高齢者の生活範囲を拡大することが望まれる。今回、訪問リハビリテーション(リハ)利用者を対象に生活範囲拡大に影響を及ぼす要因について検討した。

[対象]2014 年 7 月から訪問リハを開始し、2023 年 10 月までに終了した利用者 601 名のうち、訪問リハ終了時に通所系サービスを利用していない利用者 101 名(男性 52 名、女性 49 名、年齢  $68.8 \pm 14.4$  歳、脳血管疾患 79 名、整形外科疾患 22 名)を対象とした。

[方法]対象における訪問リハ終了時の Life Space Assessment(LSA)利得点数を目的変数に設定し、性別、年齢、家族人数、要介護度、訪問頻度、実施期間、Frenchay Activities Index(FAI)点数、装具有無、歩行補助具有無、FIM 合計点数を説明変数とし、重回帰分析を行った。本研究は当法人倫理委員会の承認を受け実施した(受付番号 120-03)。

[結果]生活範囲の拡大に影響を及ぼす因子として、家族人数と FAI 点数が抽出された( $p < 0.05$ )。

[考察]多くの先行研究において、地域高齢者の生活範囲拡大には家族の外出援助と IADL 能力が関連すると報告されている。本研究の結果から、心身機能低下や後遺症を呈した在宅療養中の高齢者においてこそ、家族の外出援助と IADL 能力の向上が重要であることが示された。訪問リハの役割として、ADL 能力向上のみならず IADL や趣味活動の獲得があげられており、生活範囲の拡大に訪問リハの果たすべき役割は大きい。しかしながら、訪問リハ利用により生活範囲の拡大に必要な IADL 能力の獲得に至っても、家族人数の因子を満たせない利用者は存在する。このような利用者に対しては、直接的な訓練のみならず、家族の外出援助を補完するサービス利用の検討など、多面的視点で支援することが必要であると思われる。